

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第88号（2013年9月）

風に吹かれて（66）

白井啓治

『里山に秋の風吹いても心安らかならず』

読書の秋、芸術の秋、文化の秋等々言われるが、今身のまわりに吹く風には芸術・文化とはおよそかけ離れた心穏やかならぬ風ばかり。

取り敢えず決着を見せたが、某市の教育委員会が市内の小中学校に、中沢啓治氏の被爆体験漫画「はだしのゲン」の閲覧制限を要請していたという。呆れ返ったり、怒ったりするべきところだろうが、某市に限らず教育委員会の思考なんてこの程度のもので、ああそうだったのという感想しかない。しかし、こういう思考感覚が文化の創造や伝承などの芽を摘み取ってしまう事を考えるとゾッとする。

教育委員会とか馬鹿な教育ママたちが必ずいう事は、子供には発達段階に応じて…である。発達が遅れているのは自分達だけだということが理解できないのである。

残虐で過激な描写は教育的に良くないという。そんな事はない。俗に言われる悪書に影響されて真似するような奴は、悪書があるうがなかるうが悪を働くのである。短絡思考しか持てないというのは、考えるために必要な諸々の情報を持つてい

ない、与えられていないからに他ならない。どの発達段階であれ、情報はフリーに与え、それに対しての自分の考えを言い合う場をつくることの方が重要なのである。

漢字を人より一つ多く覚える、数学の公式を一つでも多く覚える勉強よりも、当面する問題に対して自分の考えを作文（整理し、まとめる）する力を養うための訓練の場、情報をフリーに提供する場をつくることの方が遥かに重要なことである。学校のテストで100点をとってもそれを活用する力が無ければ、何の意味もない。学んだ学問を生かすためには、既成を打ち破る突飛でもない発想を持つことなのだから、そのためには何に対しても規制を先ず捨てる事が重要である。前にも一度書いた事があるかと思うが、規制には規正する力はないのである。規制は反発しか生まないと言っても良いだろう。こんなことずつと昔から言われている事なのだが…。

さて、話しは突然変わって、「今という美しい時を創る努力をしていますか」とは、小生常々自分に問うている言葉である。自分にとって美しい時を創るためには、間断なく「面白い、面白い」「お洒落、お洒落」「いいね、いいね」の言葉を言い続ける事が必要である。何にもなくても「いいね、

いいね。面白い、面白い」と自分に言い続けていないと、美しい時を創造するヒントを見逃してしまいう事になる。

そんな事をブツブツ口にしなから歩いているとボケた爺さんだと思われそうであるが、散歩しながらも何かを見ては「いいね、いいね」「へっっ」「あッ、面白い、面白い」と口に出して言ってみると結構何かの発見があるものである。

創造のヒントというのは構えていても見つかるものではないが、「いいね、いいね」などと意識して口にして見ると、何気ないものが何気なくないものとして見えてくるものである。思考というのは前向きにしていないと美しくならないもの様である。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

ホラー映画の解説をしようというのではない。最近、世界中に、ある病魔の足音がヒタヒタと近寄っているのを、多くの人々は認識していない。その病魔とは『天然痘関連事情』である。人類の叡智で、地上から葬り去られた悪魔に、再活躍されては、たまったもんじやない。

天然痘により、徳川将軍家でも、幼少の世継ぎ候補が、何人も命を奪われた。勿論、皇室でも一般庶民でも、幼児のみに限らず立派な青年まで、多数この感染症により、命を奪われている。

* * *

【これから天然痘関連について述べる出典の根拠は、エンカルタ・エンサイクロペディアCDROM・インターネット検索・日経サイエンス誌・他より得たものである。】

「天然痘」とは「痘瘡」または「疱瘡」とも呼ばれ、天然痘ウイルスを病原体とするヒトの感染症の一つである。非常に感染力が強く、全身に「膿疱」を形成し、昔は致死率3分の1とさえ言われた。そのため時により国や民族を滅ぼす遠因ともなった。本病は、例え治癒しても癍痕（あはた）が残り、世界中で「悪魔の感染症」と言われ、20世紀だけで3億人以上が命を奪われた。1960年代には、世界中で毎年2000万人が感染し、およそ200万人が死亡。

本病の対応策を調べてみると、1796年、イギリスの外科医エドワード・ジェンナーが、「牛痘」に感染した人は、天然痘に対して免疫を持つ事を知り、1798年、「牛痘種痘法」を開発し、画期的な効果が見られるようになった。

ジェンナーの功績・18世紀頃イギリスでは、一般的に天然痘予防策として、天然痘の軽い患者の膿疱から採取した膿汁を、健康な人に接種していた。しかしこの方法では発病する人もあり、死亡する人さえ続出した。ところが、牛飼家族に殆ど天然痘が発生しないことにジェンナーは気づき、1796年、8歳の少年に牛痘の膿汁を接種し、6週間後に天然痘の膿汁を接種しても、少年は健康のままであった。ジェンナーは98年にこれらの経過を記録として公表し、その論文の中で、初めて「ウイルス」という言葉を使った。ジェンナーは、牛痘を接種するということで、宗教界などから多くの反論があったが、優れた効果のため、世界に受け入れられ、後、フランスのパスツールにより、現代的なワクチンに改良され、人類から天然痘は駆逐された。

日本では寛政4年（1792）、ジェンナーより早く、秋月藩（現福岡県）の藩医・緒方春朔が、人痘接種により、予防に効果を挙げた。その後、日本で牛痘が接種されるのは文化7年（1810）ロシアに拉致されていた中川五郎治が帰国後、初めて牛痘を接種し、成功したが秘密にしていたため、広く普及することはなかった。その後、牛痘接種が正式に採用されるのは嘉永2年（1849）佐賀藩がワクチンを輸入・接種してからである。

天然痘の最古の記録はBC1350年頃エジプトに、物的証拠としてはBC1100年代に没したエジプト王朝のラムセス五世のミイラにその痘痕が見られる。BC430年頃アテネのペストと言われた記録は、明らかに天然痘であり、BC165〜150年にかけてヨーロッパでは少なくとも35

0万人がこの病気で死亡したと言われる。

中国では、AC495年に「斉」の国で、「北魏」から本病が侵入したと記録があり、後、たちまち全土に広がり、6世紀前半には朝鮮半島にまで蔓延した。

日本では、神をないがしろにし、仏教を導入した天罰として天然痘が侵入したように「日本書紀」には記されているという。586年、敏達天皇の崩御も天然痘と考えられ、752年開眼の奈良の大仏は、この病魔を鎮める祈願のためといわれる。そして北海道では江戸時代、内地の商人により、アイヌ民族に初めて天然痘が散見されるようになったと言われる。

天然痘こぼれ話・春日の局は、幼少のころ天然痘に感染しており、免疫があると判断され、家光の乳母に任命された。しかし家光は軽く発症したので、局はわが命をかけても…と、家光の治療祈願をし、家光全回復、彼女は神仏への約束を守り、家光がどんなに勧めても、生涯、薬を服用することとはなかったという。

わが国の著名人の天然痘発症記録は、明治天皇・高杉新作・夏目漱石など多数あり。

* * *

天然痘を撲滅した経緯・1958年、世界保健機構（WHO）が総会で「世界天然痘根絶計画」を可決し、世界各地でその強力な推進が図られた。

中でもインドは、最も被害が酷かったが、それは「天然痘にかかった人は、幸福がもたらされる」という宗教上の観念が根強かったからといわれる。WHOは天然痘患者が発生すると、その発病1か月前から患者に接触のあった人々を徹底的に洗い出し、種痘を行い、ウイルスの伝播・拡散を防い

だ方法が功を奏し、まずインドから天然痘患者の激減を図った。この方針はアフリカ・南米でも実施され、1971年には、両大陸から天然痘は根絶された。

そして1975年、バングラディシユの3歳の女の子がアジアで最後の記録が残る患者となった。更に1977年、ソマリア人青年が自然感染最後の患者となり、その後3年経っても、世界中から一人も発生がみられなくなったので、1980年5月8日、WHOは、「天然痘根絶宣言」を行った。天然痘は人間に感染する感染症で、人類が根絶した唯一の例となった。

そして1980年アメリカとロシアの特定機関を除いて、世界中の天然痘ウイルスは全て破棄された。そしてこの両施設のウイルス株もWHOで破棄する決議が行われたが、2001年の同時多発テロ以来、万が一に備え、現在も破棄されず保持されたままになっている。

一方、日本では1955年の発生が最後で、現在ワクチンが一部冷凍保存されており、同時多発テロ後、自衛隊員に投与された経緯がある。

WHOにより世界中で1976年以降、**予防接種は廃止**されているが、現在アメリカではワクチンを備蓄しており、製造施設はいつでも再開できる状態を維持している。

なお、米国のCIAは、世界中で天然痘ウイルスを、今なお、隠し持っている可能性のある国として、北朝鮮・フランスを挙げている。

* * *

さて、ここまででは単なる文献からの拾い書きで、なんちゆうことはないが、ならば**恐る恐る恐怖の足音**とは何か…？

それは、WHOの天然痘終息宣言から、既に33年経過しており、多くの地域では、最後の発生又はワクチン接種廃止からほぼ40年経過している。と言う事は天然痘に全く免疫を持たない人が、人口の約半分を占めているという事である。しかし、いくら無免疫の人口が増えようとも、この世に天然痘の病原体が存在しないのなら問題はなさそうであるが、実はそうはいかない。

「牛痘」や「サル痘」の病原体は、人の天然痘ウイルスの仲間であり、自然界では、齧歯(げっし)動物の体内に潜んでおり、到底根絶できない。それゆえアフリカに生存するアレチネズミなどを飼い猫が捕食すると、人体への感染が危惧される。

いや最近、現実にもその現象が見られるようになってきた。牛痘やサル痘は、牛やサルにそれほど悪さはしていない。勿論人に感染しても、昔はそれほど影響は見られなかった。しかし、人体への影響は、昔は人間が殆ど天然痘予防接種により免疫を持っていたために、表面に現れなかったのかもしれない。現在全く免疫を持たない人口が増えてくると、そして**エイズ**(後天性免疫不全症候群)感染者などに、牛痘・サル痘ウイルスが感染すると、歯を剥いて本性を發揮し、人間を襲う形に変貌しつつあるという。更に、ラクダ痘、アライグマ痘・リス痘・ネズミ痘等、自然界には天然痘の親戚のウイルス(オルソポックスウイルス属)によるポックス病は、ワンサとある。

さて、これらのポックスウイルス群は、これらの動物の種内のみで静かにしていれば問題はないところが、人類は焼畑農法で野生動物の領域に深く侵入したり、秘境の珍獣として捕らえ、ペットや展示動物として飼育(=ストレス強化)すると、

ウイルスが大きな変換を起こし、人間に牙を剥く。天然痘の免疫が全くなく、或いはエイズ感染者が、特にサル痘に感染すると、えらいことになる。

【余談だが、1990年代、JICAは中米ホンジュラス国の栄養改善援助目的で「養豚開発プロジェクト」を立ち上げた。私はこの国に、日本で強烈な被害を出した豚の悪性伝染病である「オースキー病」(AD=米国名復性狂犬病)が存在するかどうかを調査するため、外交官・スポーツを与えられ、政府から派遣された。細かく調べると、何とこの国には恐怖のADが広く潜在していた。ところが、かの国の養豚方式は、日本みたいに狭い所にギュウギュウ押し込めて飼育する方法ではなく、半ば放し飼いの状態(焼き印で所有権証明)で、豚は殆どストレスを受けることはない。従ってこんな悪性の病原体に感染していても「病気」は殆ど見られない。

(本国では、私の実体験だが母豚は道路の真ん中で寝そべり子供に授乳中。バスは豚がどいてくれるまでじっとして動かない。乗客はそれに何ら文句を言わない。セカセカ日本人では考えられないのんびり風景。)

生き物は全て縄張りを主張して生きるもの。それが、環境良好で、ストレスの少ない状態では、たとえ悪性の病原体に感染していても発症はしない。すべてがそうとは言わないが、先進国の畜産は、金儲けのため、最小の経費で最大の利益を得ようとして、動物に甚大なストレスを与え、貴重な餌を病原菌に喰われている。更に私に言わせると、日本人は進学競争、出世競争、スポーツ・芸能・学会などあらゆる面で過激な競争が**過重ストレス**となり、病的社会(うつ病・自殺・引きこもりなど)

を生み出している。これも文明の暴走だ！」

さて、アフリカの奥地で、ネズミを飼い猫が捕らえ、ネズミを持つサル痘が猫に感染し、更に猫から人間に感染すると、重大な事態へと展開する。現実にはコンゴ・カメルーン・ガボンなど、そして米国内で、人間にサル痘が、かなり発生している。

これまで天然痘種痘の免疫で護られていた人口が減り、或いは短寿命の国では、殆どの人口が免疫無防備の状態に化すると、同じ霊長類のサル痘に感染し、思いもよらない障害が世界の各地で発生しつつある。国際交流が盛んな今日、その懸念は世界どこでも存在する。近年中国は、アフリカに色気を出しているが、13億人の人口を抱えサル痘が蔓延したらどうする気か？ あれだけの大国に、なぜ知恵者が現れないのか？…孫悟空は助けしてくれないぞ！

牛痘についても、これはヨーロッパに今でも多数発生しているが、同じく齧歯類が媒介するので根絶できない。HIV・がん治療中や、臓器移植者は免疫機能が極度に低下しているので、牛痘でも天然痘並の強烈な症状の出る人もいるという。これは、アメリカでもクマネズミ・ドブネズミのような都市型齧歯類やプレーリードックから飼い猫のルートでも多数見られるという。

似たようなことが**日本住血吸虫**でも…

ヒトの住血吸虫には、マンソン・ビルハルツ・日本住血吸虫の3種があり、全世界で2億人が感染し、2000万人が重傷、毎年20万人が死亡している。貧血はもとより、腸、膀胱、脾臓、肝臓などが侵され、致命的な内臓出血を引き起こす。

成虫は、1cmぐらいで、30〜40年間も生き続ける。治療しても再感染を起こし、ワクチンはまだない。日本ではマンソン・ビルハルツの中間宿主はいないのでこの病気はないが、日本住血吸虫は、国内に多数生息していた「ミヤイリガイ」を徹底的に駆除した事により、1976年以降の感染はない。しかしミヤイリガイは最近一部地域に生存が認められているので、中国やフィリピンから感染者が来日し、虫卵を含む糞便を川の近くで排泄すると、再び感染サイクルが復活する可能性がある。1948年には中共軍が台湾進攻直前に、日本住血吸虫により、壊滅状態となり、歴史家により、「台湾を救った吸虫」と言われた。このように病源を完璧に駆除することは不可能に近い。

同じような事はがん細胞についても言える。どのような手段を講じてても、完璧にがん細胞を体中から排除する事は至難の業といわれる。私自身、前立腺癌を13年前手術で摘出した念のため放射線で灼(や)いて、完璧に対処できたと思っていたら、12年後PSA値がかすかに動き、これはがん細胞の再復活と判定。現在治療中。が、やつとPSA値0・003の測定限界値以下となり、最近解放されたばかりである。

人類は自然界に対し、幾多の挑戦を重ねても、完璧な勝利などありえない。文明は極度に進化し、万物の霊長として君臨したつもりが、いつもあのチツポケな微生物に命を狙われている。人類は叡智を働かし、自然を征服したつもりかも知れないが、真に、おこがましい限りである。

石岡のお祭り「山車の上に乗る人形」

兼平智恵子

「守木町の菅原道真さま」

石岡のおまつりまでに、いよいよ一か月余りとなりました。夏休みの子供たちも本格的に太鼓や踊りの練習に力が入ります。おまつりの出し物として山車の上に乗る人形と町内の皆さんのエピソードをご紹介します。

おまつりに華やかさを誇る十二体の人形の内、これまでに金丸町、香丸町、國分町、若松町、青木町、中町、守横町と七町内の人形をご紹介します。今回は、守木町の菅原道真さまです。

守木町は三五五号線、金刀比羅神社入口近くの信号「守横新道西」交差点から土浦方面に向かうこと次の信号、守木町郵便局前「守木町」交差点までの通りの、左右に広がる町並で、現在の町名では国府六丁目、国府三丁目、総社二丁目となり、戸数は七十軒です。多い時には百二十軒もあったそうです。

地名について、石岡の地名（石岡市教育委員会発行）より一部抜粋してみます。

大掾氏被官の森（守）木氏に由来するという。戦国期は府中城の一郭、慶長年間（一五九六〜一六一五）新たに府中領主となった佐竹氏は、大掾氏の府中城を破壊するとともに、城内の旧大掾家臣団屋敷地を中心に新しい町をつくる。

香丸氏屋敷跡に香丸町、森木氏屋敷跡に森（守）木町、その中央に町の中核即ち「中町」をつくり、その三町を中心に町立を行う。

「諸説2」守木町は、昔森木殿が在り、石岡森金

刀比羅神社、又は「もんぬき木の森、もりよこ神の守」と謳われた程で、守木は木の森、守横は神の森である。森木町を守木と改めたのは、御大典を記念しての後である。とあります。

府中城（現石岡小学校敷地内、十五代大掾詮国によって一三四六年より数年を費やし築城したものとされている）が、佐竹義宣氏によって落城し、府中領主となった佐竹氏により新しい町となった石岡は

、江戸時代は水戸街道の宿場町として栄え、明治、大正、昭和と石岡は商業、醸造、製糸、桐材等の産業で繁栄、発展していきました。

守木町の山車人形、菅原道真さまにつきましては

当会報先月号でお世話になりました守横町の櫻井様のご紹介で高野菓子店様に伺いましたところ岡崎商店様へご紹介頂き、そして田中石材店様へご紹介頂き、田中様おっしゃるには祖父の時代に菅原道真の人形だったと話していたことを元に昭和三十年代につくり直し、更に近年、山車と共に人形もつくりなおしたものが現在の道真さまで有ることが解りました。果たして、何時つくられましたか。更に聞き取りを進めました。

時々お伺いする中藤米店様を尋ねましたところ、魚籐様をご紹介頂きました。なんと現在の人形を購入に行った方でした。石岡の商工会議所より岩槻商工会議所に依頼、ご紹介頂いたそうです。しかし人形完成の時期までは確認出来ませんでした。そこでパソコン等色々ご指導頂いている前島様に期待かけました。確か山車をつくり直したのは南台の惣野代工務店様、是非聞いてみて下さい、と。

果たして……。昭和六十三年八月二十八日、新しい山車と新しい人形のお披露目式が行われたそうです。

守木町は終戦後、芸者さんの乗った屋台が二〜三回登場したそうです。その屋台に「森木町」と付いていた町名が現在の山車に引き継がれているそうです。因みに芸者さん招いての屋台の最終は昭和五十四年、年番の時だったそうで、また、平成の世にも風流な芸者さんの屋台が拝見出来ましたらと希望を大きく膨らませる私でした。

祭神を大物主神（大物主神は山と森の木という自然の生命を御神体として鎮座することを特徴とする日本最古の歴史を有する神）とする金刀比羅神社。

石岡の歴史に寄与した人々の眠っている、特に有名なのは漫画家、手塚治虫氏のご先祖（府中藩医、手塚良運）の墓のある清涼寺。

おまつりには学問の神様、菅原道真さまに見守られながら、石岡の歴史にも触れて頂くことを望みます。

町内六人の皆様、守横町の櫻井様、南台の惣野代工務店様、ご協力を頂き誠に有り難うございました。

・暑さにも負けずトマト大笑い 智恵子

「富田町の楠木正成さま」

・残暑に迎えられ生まれたての太鼓の声 智恵子

いよいよ旧石岡市街に熱く燃える三日間がやってきました。町内のあちらこちらで練習に余念のな

い太鼓の音が一層、おまつりへの気分を誘っています。

シリーズでご紹介しています今回の山車に乗る人形は富田町の楠木正成さまです。

江戸時代の宝永年間（一七〇四〜一七二一）まで富田町は「馬之地」と呼ばれていました。そして府中藩主松平氏支配下の正徳年間（一七一一〜一七二六）に佳字佳名をもって「富田」と改められました。馬之地の由来は常陸国府のこの地に国中の馬を集め、職にあった人が住んでいたからだと言われています。

町内には常陸大掾氏の菩提寺平福寺、富田北向観音堂、登録文化財に指定されている府中菅井、府中六井の一つ室ヶ井跡（六号国道沿い、お仏壇のまっやの前、善隣幼稚園へ向かう道路側の角辺り）、公共施設では国府公民館（旧福祉会館）等、歴史のある町並で現在の町名は国府四〜六丁目、貝地二丁目になっており、戸数は一二〇軒余りとなっています。

最初伺いましたのは丸玉鮮魚部様でした。山車については吉野さんに聞いて下さいとお宅を案内下さいました。吉野様は生憎お留守でした。丁度来客中でした隣家の高山様を尋ねてみました。「ささら」だったらわかるが、山車はやはり吉野さんです。」とのことでした。

「富田のささら」は伝統ある風流物で茨城県指定無形民俗文化財になっています。おまつりの初日の神幸祭、最終日の還幸祭の両日に神輿の露払いの大役を務めます。屋台に乗る黒漆塗りの三匹の獅子は曲に合わせて優雅に舞います。私にとりましては、舞う仕草がなんとも愛くるしく、思わず笑みがでてしまう、いつまでも見ていたい出し物です。

このささらにつきましては改めて、当会報でご紹介したいと思えます。高山様には取材のお約束をしておきました。

吉野様はおまつりに関して役員をなさっているということもあってお忙しいにも関わらず富田町の山車と人形についての貴重な文を寄せて頂きました。

それでは吉野様の原文のままご紹介します。

富田町の山車を説明するには、山車保有の各町内とは生い立ちが違ふところから説明することになります。

私が一回目の青年会長になったのが昭和四九年九月～五一年九月でありました。まだ二三才で大変若く、三〇代から四〇代が多い現在の各町内の青年会長とは全く違い二〇代で多くが青年会長になっていた時代でした。

私の一〇代は祭りが低調で数台しか出し物が出ない年もあり、二〇代は山車を中心にやや盛り返しつつあるくらいで、四〇台以上の出し物が出ている今日の石岡の祭りの隆盛は当時予想さえできず出し物を毎年出さない町内も多く、ましてや氏子会の一五町以外の郊外の町内は出し物をほとんど持っていない様な時代でした。

こんな中富田町は、当時年番くらいしか出さなかった「ささら」は特別なものとして、幌獅子しかない町内で青年会の人数的伸び悩みに危機感を持ち、低調な祭りの中でも獅子より華やかな山車の人気が上がっているのを見て「私たちも人気の山車を持ち、富田町の若い人達の山車町内への流出を止め、また富田町へ出てみたいとの他町内からの参加者の流入を図らないと、このままでは我が富田町は祭礼の参加さえ危ぶまれる事になる」

との思いを当時の青年会員達は年々強く持つようになりました。

そう言った思いを基に何度か町内会に山車作成を諮りましたが、山車が高額でありまた三台目の出し物を持つ事への抵抗もあり、良い回答は得られず、この様な情勢を受け青年達全員で真剣に討議した結果、必要額を我々で集めてもとにかく富田町の山車を作ろうとの決断となりました。

現在の自分の事しか考えない世の中の風潮から見ると当時の富田町の青年達の純粋な熱意は本当に素晴らしいものではないでしょうか。

二〇数年前のお祭りの笠貫（打上ぎ）の一夜の決断が全ての行動の始まりでした。

青年会員からの預り金は、毎年積立てを続け、ある金額になった時点で青年会の一員の大工さんと所属会社の棟梁の我々の熱意への賛同、協力を得まして、卓越した技術と選りすぐったケヤキの製材を破格で提供していただける事にもなりました。「山車が完成したら全て富田町に寄贈する」との山車建立の趣旨の基に、総ケヤキの山車の製作が始まり、太鼓を含め備品も並行して揃えて行き、またお囃子の練習も柴野様という素晴らしい山車囃子の万能プレーヤーであり、有能な先生の全面的な協力得て覚えていくことになりました。

さて山車の上のシンボルの人形を何にしようかと考えた中、色々な候補がありました。水戸光圀公が忠臣と称え、時の幕府の足利尊氏と対した楠木正成が私達のあきらめない不屈の精神と相通じてよいのではとなりまして、埼玉県岩槻市の老舗の人形屋さんに製作をお願いし現在の立派な楠木正成になりました。

その後青年達以外の支援者も年々現れまして一

〇数年前に悲願の山車が完成しました。山車運行の実績を積むためにも、また町内全般の深い理解を得る為にも、暫らくは青年会所有の山車として石岡の祭りに参加しておりましたが、新たに町内会と話し合い当初の趣旨通りに平成二〇年に富田町青年会から富田町に山車、備品一式を寄贈し、名実ともに富田町の山車として老若男女がよなく楽しみ石岡の祭りに参加している今日の姿を迎えております。

たくさんの賛同・協力者の皆様方の誠意に心より感謝致します。 著者 吉野 宋一

吉野様には突然の山車人形についての問いかけにご丁寧に寄稿して頂き感激でございました。厚く御礼申し上げます。富田町青年会の諦めない精神と心一つにして成し遂げた富田町の山車は町内会の皆さんと青年会の皆さんの心の誇りとして楠木正成さまと共に後世に確りと引き継がれていく事と熱く思いました。

吉野様とはそれぞれの町内自慢の山車と人形が何時でも見学出来る「石岡の山車会館」設立の夢を語り合いました。丸玉様、高山様、岡田呉服店様、梶間様ご協力有りがとうございました。

（参考資料・石岡の地名、いしおか一〇〇物語）

《ささら》

アレンジ・蕎麦・蕎麦会堂料理のお店です。

（ギター文化館通り）
看板娘（大）「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話 090-34-0000

土浦・亀城

小林幸枝

土浦は古くから霞ヶ浦や利根川を使った水運の拠点として栄え、中世以降は小田氏や佐竹氏など常陸国で活躍した豪族がこの地を治めました。江戸時代には徳川家の近臣である土屋氏の城下町となり、水運と同時に江戸と水戸を結ぶ水戸街道の要所として、市内には本陣や旅籠、多くの商家が軒を連ね、商いの町として大変な賑わいを見せま

す。
土浦城は、水に浮かぶ亀のように見えた事から「亀城」と呼ばれました。現在、城跡は公園となり、本丸や二の丸跡、水堀、緑に彩られた古い櫓門は土浦の象徴的存在として市民の人達に愛されています。又この櫓門は、江戸時代の物としては関東地方で唯一現存する物です。階上の太鼓で城下に時を知らせていた事から「太鼓櫓」とも呼ばれていたそうです。

また、江戸時代にタイムスリップしたかと思うような蔵造りの建物が残る旧水戸街道沿いの中町通りには、江戸時代末期に建てられた見世蔵、袖蔵をアンテナショップに改修した土浦まち蔵、大徳や時村、創業100年の老舗蕎麦店・吾妻庵や重厚な江戸商家の矢口家住宅などがあり、気軽に散策しながら古い建物めぐりが楽しめます。

今迄何度も亀城公園に立ち寄ろうと思っていたのですが、なかなかよることが出来なかった。しかし、今回初めて亀城公園に行ってみて、とてもいい場所だと分かり、今まで来る機会を作れなかったことを残念に思うほどでした。

今度は、旧土浦中学校本館などに行ってみようと思っています。あまりにも近く、何時でも行けるなんて思っていると、何も見ないで終わってしまいそうです。思いついたら吉日でいろいろ行ってみることが大切ですね。

新盆に想う

伊東弓子

去年までお盆の用意は、父や母、先祖を迎える為、楽しい気持ちで行ってきた。今年は緊張しているのだろうか、力が入り早くから準備に係った。あなたを迎える新盆だったからだと思いつつながら、暑さの中でも苦にならなかつたし、一つ一つ仕上がって行く満足感に包まれていた。ただ接客の不安があつたが案ずるより生むがやすし、お一人お一人との短い話しの中にも深い意味を受け取れる事ばかりだった。

あなたとの繋がりや仕事の事、思い出を語ってくれた。あなたを一面から見るとは無く多くの人と係ってきた一生だった事、沢山の人がいろいろの角度から見、感じて評価してくれた事を改めて感じた三日間だった。「盆」という三日間。この時間があつた事を有難く思った。十五日になると明日は送って行かなければと思うと、今迄のお盆とは違う心寂しいものが胸一杯に広がっていた。去られてしまう思いが一層淋しさを深めていた。

十六日の夜は孫と三人で夜の道を歩いた。
「お爺ちゃんは何処まで行ったかな」
七月十日の月が西に傾いていた。雲の所為で星は二つ三つしか見えない。私は月の方に向かって大声で叫んでいた。
「あなた、又来年来てね。待っているね」

「爺ちゃん、待ってるよ」

と孫達も負けずに空に向かって呼んでいた。

「もう天国へ行ったかな」

「十万億土の西方浄土へ帰るんだから、まだまだ着かないよ」

「そこはどこ...」

「遠い遠い所よ」

「うん、じゃあまだ着かないか」

私は天国という言葉、世界をあまり使いたくないので、額かず「十万億土の西方浄土」を繰り返して歩いていった。

向う場の家々も、目の前の高浜の町も、背にしている高崎の宿並も盆の賑わいから、静かな夜に一変したことだろう。と、知り合いの家の様子など想像してみた。波も静かだ。今年は湖からの悪臭もない。心地よい風が頬にあたる。

気持ち良さに浸る中で、「あの子達も帰って行ったのだろう」と幼い子供達に思いを寄せた。

死んで産まれた姉、産まれて産声もあげないで亡くなった兄、三ヶ月で亡くなった妹、弱かったのだろうと父母の悲しみを思う。朝一人亡くした方一人亡くし、気が狂わんばかりだったという話しを聞いた。記録（江戸時代文化年間の六年間）の中にもある。一村百十九件、人口は六百人位、その中子供は百人産まれていて十九人が亡くなっている。現在の一〜二才が三分の一、一才にならないで亡くなった児が三分の二という割合だ。

貧しさの中で幼い児が無くなる率が多かった。それは終戦後も十年位は尾を引いている。「一夏一冬」という言葉もあって「まあ一年たてばなんとか育つよ」と耳にした事があった。産まれて間もない子の様子をみて将来を思い、産婆が処置した。

という話しもある。

食べさせる事だけでなく着せる物が無い中では一人増えるのも大事で、藁にのせ、盥を被せて(少し隙間をあけて置く。一晚経って生きていたら育てるといふ地方もあったと聞く。

幼くして亡くなった児は親不孝といい、賽の河原に行くという。水はなく石がごろごろしている所で、子供達は父母への供養に石を積んで塔を作る。「二つ積んでは父のため、二つ積んでは母のため」と親への不幸を詫びて積んでいるが、そこへ鬼がやってくる。鉄棒を殴り散らし逃げ惑う子供達を追いかけ回す。そこへお地藏さまが現われて夜の中に隠してくれる束の間の安らぎがある。その繰り返しの世界だという。

子供の成長を願う思いは、どんなにか切実なものだったろう。現代とは違う生活の中で神佛に頼る事が多かった。地域での集いには共通の苦しみ、悲しみをのり越えて幸せへの願いを込めた催しにもわかる。幼い子供達はかりでなく人とならず(一身のまま)に亡くなった人へのおまいりも地域でしていた。

私の娘の頃だった。

寺の観音堂へ米をあげ、戒名を書いた紙を張って成仏を願いながら歩いてきた女達の一行だった。人への優しい思い、今は随分変わったように思う。

石佛もあちこちにある。欲深い人間の重い願いを背負って炎天下の中で、風雪に耐えて、草深い中に隠れ、埃を被って立っておられるが何も言わない。その中でも子安観音は堅い石の膚に柔らかい母の肌を感じる。乳房を大きく刻んだのも乳の出の豊かさを想像させてくれる。それを含む赤児は片方の乳をしっかりと握っている。どの佛も母の願

いと子の育とうとする姿を見守ってくれている様だ。女達が小銭を出しあつて、皆の願いを込めて作り上げた物だ。

韓国に行った時、孫の祝いに参加した。産まれて一年経つと「二つの祝い」という催しがあった。親戚、職場の人が集まったの祝いだ。ご馳走を食べた後、盆の上に用意した「お金、鉛筆、紐」を子供に掴ませる。お金を掴めば将来お金には困らないと喜ぶ。鉛筆を掴めば勉強をよくする子になると喜び合う。紐を掴めば長生きすると手を叩く。こういう祝いの中でその子を知って見守り育てて行くのだそうだ。

子となる数多い種がこの世に産まれてくる事なく、闇から闇へと姿を消していく。私達は沢山の人、多くの物の犠牲の上に生きている事を忘れてはいけないと思う。

あれこれ思い出しながら、子供や孫が頑張っている姿を有難く思う。お盆は先祖をしのび、後へ続く子孫へのおもいを繋いでいく大切な時を与えてくれた。長い長い時間の中にいる私、広い広い中の一部として存在している私に気づかせてくれた催しだった。

旅先で拾った黒あげ羽蝶を持ち帰った。美しい色彩に捨てる事が出来なかった。手の掌に載せて暫く見ていた。この姿はあなたではないですよ。風鈴も夏の頃とは違う涼しい音色を運んでくれている。この音色あなたの呼んでいる声ではないですよ。

新盆の夏もいった。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

ギター文化館

2013 CONCERT SERIES

- 9月 1日 ロス・トレス・アミーゴス
- 9月 8日 里山と風の声コンサート
- 9月15日 原善伸ギターリサイタル
- 9月20日 長谷川きよしコンサート
- 10月27日 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル
- 11月 3日 La Corde Vibrante
- 11月 4日 新進気鋭若手ギタリスト4人の会

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

今年の夏は最初のうちはできるだけクーラを使わないようにすごそうと心がけていたのですが、途中からあまりの暑さでクーラーのありがたさをかみしめる結果となりました。それでも8月も終わりに近づくと、秋の虫は忘れずに鳴きはじめ、日の長さもかなり短くなってきました。

明日から九月となりますが、防災の日ということでテレビでは関東大震災の貴重映像などを流しながら近づく大震災への警鐘を鳴らしています。しかし、人間はいやな事や辛いことはすぐに忘れて痛みを和らげてしまうようです。東日本大震災の時はあんなに被害に胸を痛め、我が家の屋根瓦は落ち、電気や水の大切さを知ったはずなのに、まだどこか他人ごとになって来てしまいました。どの元過ぎれば熱さを忘れてしまうのですね。

私もこれではいけないと時々、2年半前を思い出しています。当時、毎日ブログで震災の時の身の回りの出来事を書き続けました。こんなことも役に立つんですね。

東京や名古屋などこれから必ず襲ってくると思われる巨大災害にどのようなことができるのでしょうか。その時に自分が地下鉄に乗っていたらどうしたらいいか、都心で身動きが取れなくなったらどのような行動ができるのか、まったく考えもまとまりません。でも災害はまたやってきます。備えをしつかりやらねばならないでしょうね。

来年春からの消費税アップは既定路線とばかり公共事業費の要求額は大幅アップ。族議員の復活は大いに結構などというありさまで。現在この東日本大震災の復興のために25年ローンで税金

(復興特別税)が徴収されています。そこに社会保障費などの名目の消費税アップ。でも社会保障費は物凄い勢いで増え続けていくのに、老朽化した橋などの補修に使うので予算が必要だと何やら最初から補助金や工事予算を取らんとする思惑での屈理屈ばかり。まったく狸議員ばかり。もうすつかり尻尾もまる見えなのにお構いなしです。ぜひ議員定数を半分にしてからに下さい。必ずやってくる大災害に本当に必要なところに集中しなければいけません。団塊の世代が定年になり今後就労人口は急激に減ります。無駄に使えるお金などどこにもありません。

そんな中、昨日ニュースで大阪府のある市の職員が「勤務中に1年間で281時間もパソコンゲームをしていたとして減給処分にした」と発表された。実は大阪では大阪市の職員が同じように2年前に34人がゲームをしていたとして処分されたことがあります。

この手の発表に多くの人が「ゲームなどをする公務員は税金泥棒だ」と目くじらを立てるでしょう。

でも、本当にそんな問題でしょうか。

今、多くの民間企業では業務用のパソコンにゲームなど入っていません。また遠隔監視も出来ません。また業務に関係のないサイトへのアクセス制限(自動的にアクセスが拒否される)もかなり浸透しています。民間企業ではゲームの入ったパソコンの利用率は20%位だそうです。この市役所などのパソコンはこんな手も打たずに、1年間のゲームへのアクセス履歴を調べて公表し、他の人への見せつけとすれば今後ゲームなどする人はいなくなると思いますのでしょいか。

このトランプゲームは、パソコンがまだ浸透する前はマウス操作の練習用に開発されました。あまり面白いとも言えないゲームですので大の大人が仕事にやるといのは、ゲーム中毒と言うよりは仕事の与え方や仕事の評価の仕方に問題があるのです。今回の職員は選挙管理委員会事務局長という肩書だそうです。仕事が暇なのでしょう。

最近、役所などでも皆一人一台のパソコンがあり、何の業務でもパソコンの画面にとらめっこしています。こんなにパソコンでの仕事が多いのでしょうか。もしそうならパソコンでやる業務を合理化したら人は半分でも多いかもしれません。

前に私の友人が話してくれたことが頭をよぎりました。それは、1年以上前ですが、とあるビルの上の方にある取引先の会社に伺った時に、そのビルの上の方のビルの下の階の部屋で窓際にいる何人もの人がパソコンでゲームをやっているのが見えたそうです。心配になって、友人は伺った会社の人に「あの下の人たちはゲームばかりやっているようにだけど、あの会社は大丈夫なのですか?」と聞いたのです。そうしたら「ああ、あれはリストラ部屋ですよ」と悲しそうな顔をして話してくれました。

公務員の情報化部門はどうなっているのでしょうか。あまりのレベルの低さにあきれてしまいました。

私にはゲームをしていたという職員のことよりもそんな遅れたようなお寒い情報化技術しかない市役所などの組織の方が気になって仕方ありません。

また、最近の若者は学生時代までは好き勝手にゲームをやって育ったはずで、就職したら勤務中

にゲームができないので「仕事の能率が上がらない」なんてことも起こり始めてきているのではないかと、余計な心配をするようになりました。

家でゲームに没頭しているお子さんやお孫さんがおられるなら、将来こんなことにならないようにしてください。

ゲームやネットでパソコンが使えても、企業で役に立つかどうかは別問題です。パソコンはあくまでも手段で、使う人の考え方や思考回路で全てが決まります。使えるとか使えないなどと言うのは次元が違う問題です。パソコンが使えても役に立たない人はたくさんいます。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

第六章 功績の値打ち(2)

打田昇三

将門の乱で兄と行動を共にして、それなりの働きがあったと思われる平繁盛は、現代なら繁華街に行けばタダで配られるテッシュペーパーさえも貰えなかった―その恩賞請求の目的から比叡山に納経する口実を設けて上京するのでは無いか?と疑われ同族の平忠頼らがこの記者会見に憤然として異議を唱え「上京を断固阻止する」と報道機関に知らせてきた。繁盛に対する宣戦布告である。

平忠頼は将門の反乱に際しては終始中立を守りさらに将門の遺児を匿ったと言われる平良文の子であり、後に下総の国で反政府行動を起こした平忠常の父親である。潜在的に将門最員の感情があ

るから、従兄弟でも将門を討った繁盛のことが許せず、繁盛がその功績を請求する為に上京する行為が堪忍できなかったのであろうか…。

繁盛は忠頼の声明発表を「威力業務妨害」の罪で告訴したため、両者の対決が話題となり、新聞の一面を賑わしていた。当時は何事も天皇の裁可を仰ぐシステムであったから、個人の喧嘩まで政府が干渉することになる。この問題は暇な人々の興味を誘ったけれども、政府の指示で結局は繁盛が奉納する大般若経は宅急便(と、言っても大型の馬で有ろう…)その馬が白馬だった?)を利用することになり繁盛は上洛できなかった―とある史書に書かれていたが、此の騒動には幾つかの疑問がある。(個人的な疑問ではあるが…)

先ず、問題が起こったという寛和二年は平将門の乱が平定されてから四十年も経っている。恩賞が欲しければ直ぐに言わなければ効き目は無いのに四十年も過ぎてからは不自然である。また恩賞を欲しがる人間が比叡山に金ピカを奉納する行為には矛盾がある。少しばかりの恩賞を貰うのに金を掛けたのでは採算が取れない。さらに平繁盛が陸奥守や武蔵権守に補されていた事実があるならば一応は恩賞を受けていたことになり、何よりも兄の貞盛から常陸国の広大な領地を受け取っていない繁盛に贅沢品を作る経済的余裕があったとは思えない。それらの言い伝えを纏めてみると全体に疑問がある上に、平繁盛という人物は兄の平貞盛と行動を共にしていながら何とも影が薄く謎めいた存在になるのである。

後の時代に曾我兄弟の仇討事件に絡んだ「道連れ詐欺」によって常陸国の広大な領地を犯人グループ(源頼朝、北条時政、八田知家)に取られたのは筑波

山麓に居た多氣大掾・平義幹であり、貞盛に領地を貰った維幹からは五代目になる。この事件に加担した御褒美に平義幹の旧領すなわち桓武平氏系領地を頂戴した水戸の馬場資幹の系統「吉田系馬場系大掾氏」に伝わったと思われる「常陸大掾伝記」には次のような記事がある。「…高望親王。後に高望の時、寛仁元年十二月十三日、民部卿宗章朝臣が反乱を起こした際に宣旨を貰って是を追究したので天下が太平になった。時の帝が御感あつて、寛仁二年五月十三日に初めて平姓を貰い是より子孫が繁栄した。高望は従二位上総介に成り、

其の嫡子・良望は当国の大掾に任じ国香と改め、従五位下、鎮守府將軍となる。其の子の貞盛は従四位上、平將軍、陸奥守、是は日本平氏の嫡流也…」この短い記述の中に年号の間違い、記録に無い事件(民部卿の反乱)などなど、間違いと重大な疑問があるから信憑性は薄いのだが、この伝記にも「平繁盛」の名が無い。一方で伝記と共に残る系図では始祖を国香に置いて次に繁盛を置いているから繁盛は生きていた?

日本外史などが伝える平氏の系統は、桓武天皇皇子の葛原親王―高見王―高望王(平高望)―国香―貞盛―維衡―正度―正衡…と続いて清盛の父の忠盛に至る。これは平家物語などのお蔭でハッキリしている。繁盛のほうは城一族の祖としているだけでお粗末であるが、これは「万骨の法則」で仕方が無いのかも知れない。しかし石岡市が歴史上で大掾氏に力を入れているらしいから、その始祖に当る平繁盛についても、もう少し何らかの情報があるのではないかと…と思う。

既に述べたように「日本外史」では平繁盛から分かれた家系を越後の城氏しか載せていないが、

「日本家系図大事典」には維幹に始まる常陸国の大掾氏と、維茂を祖とする岩城氏の二流を示している。大別して常陸、岩城、越後の三国に繁盛の子孫が伝わったと考えて良いのであろう。残念ながら繁盛の墓が何処にあるのか「新編常陸国誌」

にも記載がない。老後を幸せに過ごしたかどうかは不明である。岩城国か越後国に行つたのであるうか：尤も父親の平国香についても将門に攻められた石田の館跡の粗末な石だけが確実な墓であり那珂港の寺院に在るとされる墓所が疑われていて国香の墓が無い。石岡の平福寺にある吉田系馬場系大掾氏の墓所に立つ無銘の石塔を無理に国香の墓とする説もあるが全く根拠は無い。普通に考えても大掾本流の墓所では無く途中から石岡に来た吉田系馬場系大掾氏の墓所にポツンと国香の墓を置く道理がない。国香以来の墓ならば繁盛―維幹―為幹―繁幹―致幹―直幹と続き、源頼朝に潰された義幹までの、いわゆる大掾本流の墓所があるべきなのに、周りは源頼朝の命令で再興された馬場大掾一族の墓とされている。国香とは時代が違つてくる。常陸国の昔を探る唯一の書「新編常陸国誌」でも平国香の墓とはしていないのである。

石岡市立中央図書館蔵の「国史大辞典（吉川弘文館）」には「平繁盛」についての記述があり、これが精一杯の記録らしいから全文を以下に紹介しておく。後は子孫のことを推測するしかない。

平繁盛 生没年不詳 平安時代中期の常陸国の豪族 平国香の子で貞盛の弟 陸奥守 正五位下

―将門記にはみえないが、寛和三年（九八七）正月二十四日付の太政官符（続左丞抄）によると、藤原秀郷や兄・貞盛とともに天慶三年（九四六）の平将

門追討に活躍したが恩賞には与らなかつたという。（注：寛和三年は四月に永延元年となる）

繁盛は筑波郡水守に居住したと伝えられるが、若い頃には上京して九条師輔（くじょうもろすけ）

（藤原道長の祖父）に仕え、武略と富裕をもつて知られており、金泥大般若経一部六百巻を書写して比叡山に寄進した。また、良文流の忠信、忠光らと

激しく争つたが、この対立は、子の維幹と忠常の世代まで継承される。子供に上総介兼忠、余五將軍維茂、多気大夫維幹などがあり、維幹の系統が父祖の後を継いで常陸に居住し、常陸大掾職を継承して大掾家をおこす。―（大森金五郎「房総の平氏及び相馬御厨に関する故事について（武家時代の発展 所収）―

生没年が分からないくらいであるから細部が分らなくても仕方ないが、平貞盛なども生没年は不明なのであるから、やはり「一将と万骨」の差は大きかった。肝心な「繁盛が何処に居たのか？」

は「①常陸国の豪族」「②筑波郡水守に居住した」「③子孫が父祖の後を継いで常陸に居住…」の項目と、嘘か誠か「金泥大般若経」のことから常陸国に居たのであるうけれども、既に述べたように伝わる史料に「平繁盛の名が無いものが多い」ことが謎である。このことを推測すると多分、常陸

平氏の家系を相続した平貞盛は、各地の役人に任命されて転勤を繰り返している間、弟の繁盛に領地の管理をさせていたのではないか？…そのうちに貞盛及びその後継者たちは伊勢国を始めとして都に近い西国に目が行き、言わば僻地である関東

には興味が無くなつて来た。そこで、自分の養子としていた繁盛の子に是を相続させて恩を売り関東に平氏の基盤を敷設してから、本流は西に進出を開始したのである。その為に平繁盛が歴史の表

面に出る機会を失つた。兄貴名義から自分の息子名義に替つた土地の権利書の山を前に、平繁盛は何とも豪華で贅沢で然も寂しい生涯を送つた。

その代りというのも変だが繁盛の子孫は平家本流のように滅びることなく連綿と続いたのである。

そうは言つても時の人になりマスコミにも知られた貞盛の系統とは違って、万骨組の平繁盛に関して伝える史料は少ない。嘘かも知れない情報でも拾い集めるしかない。分かつている限りで、兼忠、維茂、安忠、維幹の四人の息子が居たようである。市史も記録している。兼忠については余五將軍の実父とする説が有る程度で何も分からない。

維茂は越後の城氏の祖となつた。第四章でも触れたが維茂の三男・重成は、前九年の役の原因を作っている。維茂の子孫の惟賢という人物は保元の乱に天皇方（平清盛方）に付いている。安忠は出羽守、陸奥権守に任官してから東北地方に定着したらしくこの家系が長く続く。維幹は常陸国（貞盛から相続した領地）を継いで大掾氏となる。

分らない人物は切り捨てて、後代まで残つた家系を見てみると、常陸国に残つた大掾氏は広大な領地を有して日本一の大豪族となつたが、先に述べたように本流が鎌倉時代に詐欺に遭つて滅亡しその跡をそっくり頂戴した支流の馬場氏も、戦国時代の末期になって豊臣秀吉と佐竹義宣の二人に思い付きで府中城を攻められ、根絶やしにされてしまった。これも因果であろうか：尤も室町時代

からの大掾氏は上杉禅秀の乱や難台山の攻防戦などで対応を誤り、衰亡の一途を辿つて来た。戦国時代には小田氏に攻められ、府中城にも居られないで田余城などに間借り暮らしをしていた。家賃が幾らだったかは記録が無い。

越後に定着した城一族は、源平対立の時代に平家を護るため木曾義仲と戦って敗れた。日本外史にも記録されているので、その概要を紹介して置くと現在は新潟県上越市に含まれてしまった旧・直江津市には越後の国府が置かれていた。其処を基盤として越後国内に強大な勢力を誇っていたのが「城氏」である。各資料ばらばらで決め手は無いのだが、大雑把な略系では平繁盛―維茂―繁茂―繁貞―繁清―維繁などと続き、途中から城氏を称するようになった。越後国は常陸国のように大國では無く上國であるから「大掾」は置かれないが名称からすると大掾と同じく国府の判官職ではあるが格が一つ下の「掾(じょう・従七位上)」の職を足掛かりに国主になったのか、或いは後で述べる秋田城介に依るのであろうか；因みに大掾職だと正七位下で一つ上だが、給料は同じである。

治承四年(一一八〇)九月、源頼朝の従兄弟に当たる木曾義仲が平家打倒の兵を挙げた。後白河法皇の第二皇子・以仁王が出した「平氏追討の令旨(皇族の命令書)」が、木曾山中にも配達されたのである。石橋山の合戦に敗れて房総半島へ逃れた頼朝は、地元の桓武平氏系豪族を味方に付けて徐々に勢力を回復し十月中旬には鎌倉へ入るのだが九月頃は未だ消息がつかめない。平家が頼朝の行方に注目している頃に木曾義仲のことが報告されたけれども、平家方では誰一人として其の名を知らない。「何だ？そいつは！」と半信半疑ながらも兎に角、誰だか分らない相手を対象に取り敢えずは北陸地方の武士団に対し「木曾のナントカ言う田舎の兄ちゃんを潰せ」という命令を出した。しかし、この田舎者が強かったのである。

かつて義仲の父親(義賢よししかた)は、兄の義朝

(頼朝の父と甥(頼朝)の兄の義平らに討たれていた。源氏が得意とした身内の喰い合いであるが、義朝一家の野望と、為義・義朝父子の不仲が根底にある。乳幼児だった義仲も伯父に殺害される予定のところ、これを憐れんだ何人かの東国武士によって木曾の山中深くに匿われ、土地の豪族・中原一族に養育されていたのである。挙兵時の義仲は二十七歳になっていた。

義仲は木曾谷で兵を挙げ、取り敢えず信濃国を選挙区にした後は亡き父親が住んでいたという理由で上野国へ進出した。しかし、その頃には頼朝も房総から戻り、関東の制覇を狙っていたようなので「万骨の法則」を思い出して信州へ引き上げたけれども、義仲の父親の地盤が上野国だった関係で部下になる者が増えてきた。因縁としては頼朝の父と兄とが義仲の仇になる訳だが、共に兵を挙げた目的は「平家打倒」であるから同志討ちはマズイ。木曾から進む義仲が、頼朝と逢わずに平家を攻めるコースとして選んだのが北陸道であり手初めに越後国へ攻め込む予定を立てた。

一方、都から命令される迄も無く信濃に一番近い越後国では在地豪族の城一族が平家一門として木曾義仲の動きに着目していた。そこに「庁下文(ちようのくだしぶみ)」と呼ばれる検非違使別当(けびいしべつとう検事総長)からの指令が齎された。この命令は権威があるもので、これに違背することは天皇、上皇の命令に反することと同罪とされた。城氏は直ちに木曾の軍勢を迎え撃つことになり、養和元年(一一八二)六月に先手を打って信濃国へ攻め込んだ。信濃の地侍たちは木曾に付く者、城氏に味方する者と分れたが結局、城一族の軍は六万余の大軍となって義仲軍と対決することになった。

た。義仲軍は評判が良くても山深い地方出身であるから、兵力は三千ぐらいいしか集まらない。誰が見ても「城軍が勝つ」という予想であったが結果は違ったのである。山深い里で育った木曾軍は山猿相手に訓練した成果で奇襲攻撃を繰り返して二十倍の敵を撃破した。尤も合戦の前に平家側は御大将・清盛公が死んでいるから「喪中」だったという言い訳は通用するかも知れない。

此の時の対決は「横田川原の合戦」と言われる。越後から攻めて来る城一族の軍勢は千曲川沿いに進軍して来た。一応は作戦で六万の軍勢を三つに分けたのだが、狭い河原のこととて満員電車と同じ状態になる。少ない人数のほうは敏速に行動できることになり、先ず越後の主力・四万の兵が木曾軍の百騎に蹴散らされて壊滅した。これではマズイと気が付いて三百騎に編成し直したけれども木曾軍はそれを八十五騎で迎え撃ち、三百を九十に減らした。但し八十五も四十二に減ったが越後軍のほうは損耗率は高いから結果的には六万の軍勢も残りが三百騎になって越後へ引き揚げた。

万骨組の平繁盛をクローズアップさせようと、繁盛の確実な子孫である「城一族」の活躍を紹介したのだが、景気の悪い話で申し訳ない。この時期(養和元年―一一八二)は平清盛の死を筆頭に平家の凋落が始まる時期であるから、元気が良いのは源氏だけで、日本全体で飢饉による餓死者が多く、京都近辺でも盗賊が出没して各所に火を放ち死者が続出する状態であった。庶民のことを考えれば、源氏だの平家だのと合戦をしている暇は無い筈なのだが；両方とも野蛮だった。

正直なところ、伊豆で兵を挙げた源頼朝も勝つ自信が無かったので後白河法皇に要請して平家と

の和睦を考えていた。しかし平家側は清盛が死んで本當の馬鹿息子の宗盛が家督を相続していたから「父親の遺言では、源氏と決死の覚悟で戦え」と言われた——と和睦に応じなかつた。その上、宗盛は奥州の藤原秀衡と越後の城資長に源氏追討の院宣（法皇の勅命）を与えるよう要請をした。

既に朝廷は後白河法皇の第二皇子である以仁王（もちひとおう）が諸国の源氏に対して「平家追討！」を命じているので、今になって「源氏を討て！」と言う勅命は出し難いと思うのだが、後白河法皇も「俺は天皇では無いから、ま、いいか！」とばかり、宗盛の要求どおりに「頼朝、義仲を討伐せよ」と小さな声で命令したのである。その冗談のような勅命に従ったのが城氏であり、当主の資長は義仲との合戦に敗れたショックで脳卒中になり死亡したから城一族も滅んでしまう。これも万骨の宿命なのであるか？ 気の毒に……

一方で奥州平泉の大豪族であつた藤原秀衡は、城一族と違つて平氏とは距離があるから「源氏討伐」の勅命には動かなかつたけれども、やがて義経を匿つたことで頼朝の大軍に滅ぼされる。それも頼朝が自ら攻め込んできたのは「冗談でも朝敵にされた」個人的な恨みがあつたからだと思う。こうして常陸国に定着した大掾氏と共に平繁盛の子孫として越後国に頑張つていた城氏は「大の字」が付かなかつた分だけ早く滅亡してしまつた訳であるが、その原因が数年後に頼朝に討たれる木曾義仲に負けただけと言うのは何とも淋しい。頼まれた訳では無いが調べてみると城一族が「桓武平氏の意地」を見せた小事件があり、其処に女性も活躍しているので紹介しておく。ただし城氏が越後で滅亡してから二十年も経つて起きた事

件であるから「嘘」と決めつけられると反論が来ないので、丸ごと信じて貰うしかない。

脳卒中で倒れた城資長の子は資盛（すけもり）と言ひ、叔父の長茂（ながもち）と共に各地に潜伏しつつ「木曾義仲を倒し父親の仇を討ちたい」と思つていたので、その義仲は同じ源氏の頼朝に狙われ義経の軍に討たれてしまつた。頼朝のところへお札に行く訳にもいかず、時代は急速に源氏の世になつていく、其の俣では桓武平氏が忘れられてしまうから「此処に平繁盛の後裔・越後の城氏あり」という行動を起こすことにした。先ず長茂が都に潜伏して一暴れし、資盛は越後に居る平家の残党を集めて同時に旗挙げをする計画を立てた。ただし正治三年（一一二〇）、二月から建仁元年（一一二一）という年代は、源頼朝が暗殺されてから二年も経つていたので時期外れのような気もするが本人たちは大真面目で、京都と越後で騒ぎを起こした。先ず京都では正月の三日に京都勤務中であつた小山朝政の屋敷が軍勢に取り囲まれる事件があつた。主の朝政は主力の部下を率いて春宮（とうぐう）皇太子、後の四條天皇が新年の御挨拶に行く警護を命じられて留守であつたから折角、狼藉者に来て頂いても留守番の武士しか居ない。その者たちが少数ながら「主家の大事！」と矢を射掛けてきたので、攻め寄せた軍勢も相手が誰だか分らない俣に矢戦さになつたけれども、双方共に無駄な合戦と気付いて寄せ手が引き揚げた。

攻めて来たのは、先に大事な時期に脳卒中で倒れた越後の城資長の弟・長茂（ながもち）と言ひ嫁入り道具のような名の人物である。主が留守の屋敷へ攻め寄せて無駄骨を折つたので、何とか反乱の意味を知つて戴こうと後鳥羽上皇の御所へ押

し掛けて勝手に他人の家の門を閉め、関東を追討する許可を下さい……と要求した。それでなくても天皇が何かを許可する場合には周りの公家たちの無駄な審議を経なければならぬのに、長持ちだか筆筒だか知らないが、いきなり現れた武士の要求が通る訳が無く、丁重に断られた。

グズグズしていると都に居る鎌倉武士が駆け付けてくる心配があるので城長茂は何処かへ行方を晦ましてしまつた。諦めが良いのか好い加減なのか分からない人物ではあるが、一応は上皇の御所が占領された事件なので、警護の武士団は緊急事態として鎌倉に急報した。上皇側も公家が大いに腹を立てたのだが、その理由は「後鳥羽上皇が歌詠みのお遊びに出られる予定を狂わされたのであるから、これは大事件である！」というもので、庶民の感覚で言えば「双方共に？」で呆れる。

結局、城長茂の行方は分からなかつたのだが、三月になると京都から鎌倉に報告が来て、吉野山中に潜んで居た城四郎長茂らが地元住民に見つけられ、大勢に囲まれて殺害された……四人の首が獄門に掛けられた——という。頭賞金が支払われたのかも知れない。無実だと困るが、昔は指名手配されると、儲け仕事？ とばかり犯人逮捕に協力してくれる人が各地に居たらしいから、現代のように逃亡生活も難しいし、凶悪犯と確定している奴を裁判などで無駄に長生きさせないで済んだ。

ともかく、鎌倉幕府は一安心をしたのだが、今度は越後国から城一族の反乱が報告されてきた。吉野山中で討たれた長茂の残党などが故国に戻り軍勢を集めて桓武平氏の末裔として源氏の世に一矢を報いる行動に出たのである。中心となつた人物は先に述べた城資盛で、この人は本来ならば桓

武平氏繁盛流の正系を継いで北陸地方に君臨する人物である。報告に依れば一味の者は越後国内に城を構え「鎌倉幕府打倒、平家政権復活」の旗印を掲げて北陸地方の諸豪族にアピールを始めた。時期外れのような気がしないでもないが、平家が滅び源氏の世となっても身内の殺し合いが続くだけで何の変化も期待出来なかった零細企業の武士団は「…そう言えば平家時代は良かった…」と改めて桓武平氏党を支持することにした。

良く考えると、この事件が起きた正治三年から三年後には將軍の源頼家も伊豆修禪寺で暗殺されて天下は北条氏のものになるのである。北条氏は眉唾な部分もあるが「桓武平氏（貞貞盛の子・維將を祖とする）」を称していたから、大相撲で言えば源氏は既に「死に体」になっている。城一族も「平家再興」だけならば慌てることも無かったとは思いますが、一族を殺害された恨みもあって北陸路での抵抗運動を活発に行ったのである。鎌倉の威光を懼れる武士団は、当然ながら城一族の反乱鎮圧に動したのだが、木曾義仲の時と違って城氏の軍勢が強かった。城氏に従わない越後の武士は「自分たちだけで戦っていてもつまらない」と気付いて鎌倉に救援を要請した。それも「…早く援軍を出してくれないと、大変なことになりますよ！」と恐喝まがいの文書を送ったから、鎌倉からは源氏累代の武将である佐々木三郎兵衛尉盛綱兄弟が現地の指揮官として出陣してきた。

日本外史や北条九代記には佐々木兄弟が偶々、家の外に居て「越後出張」の命令を受け、家にも入らずその場から戦場へ向かったのが僅か三日で現地に着いた…と大袈裟に書いてあるがコンビニへ行く訳では無いので嘘話だと直ぐ分かる。緊急

出動で手勢だけ率いて来たのであろう。主力戦闘員は幕府の権威で現地の武士を狩り出せば良い。攻められる側の城小太郎資盛は「鳥坂」に城砦を築いていたと言われる。城と言っても天険を利用した山小屋程度のものであろう。苗字に「城」が付いているから屋根さえあれば城になる。地名が現在の地図に残っていないので城跡を特定出来ないが合戦の状況から推測すると背後に山を背負った峠の街道沿いの場所だったよう、私は柏崎の東方がそれらしき場所と勝手に推定している。

越後国内で、どちらの味方をしようかと迷っていた武士団は鎌倉から大物の指揮官が来たので攻撃軍に加わりその者たちが道案内をしたらしく、間もなく鳥坂口は鎌倉の兵で埋もれてしまった。佐々木盛綱は城資盛に使者を送り「御教書（みきょうじよ）の趣旨」を宣告して、これに従うように申し入れた。御教書というのは基本的には三位以上の公家が出す訓戒の書であるが、この場合は幕府重臣が出した降伏勧告書であったろう。正確に言う、此の時には源頼家が未だ鎌倉幕府の將軍に補任されていない。頼朝暗殺から幕府内で混乱があったことが窺われる時代である。

歴史は繰り返すと言うが、この場面は平将門が石岡の国府館を囲んだ状況と同じであるから囲まれた城資盛が要求を拒否したけれども、常陸国府で威張って居ただけの藤原維幾と違って日本一の大豪族（？）平繁盛の子孫である城資盛は言うことが立派——「御教書の趣きは確かに承りましたが、此処に立て籠っているのは平家の一門として源氏に一矢報いようと兼ねてから思い定めていたことですから、どうか攻めて来て下さい。一戦を交えて勝負をつけましょう…」と返事をした。

当時の合戦は、敵を撃滅させることよりも個人が手柄を立てることが重要であったから、この場合も「戦闘開始」の花火が上がると同時に寄せ手の武士団は矢を射掛けて敵を牽制してから、一番槍の功名を狙って木戸口に殺到した。それを城内から二十騎ほどの武者が出て迎え撃ち、誘導するように木戸内に引き入れた。攻める方は簡単に入れたから喜んだのだが、敵は山の上に居るから一斉射撃を受ける。矢さえ飛ばして置けば誰かに当る計算で鎌倉の武士たち三十騎ほどが其の矢で射取られ寄せ手は苦戦をしていた。

その中で特に百発百中の射撃をする武者が居て同じ射られるにしても鎧ごと胸を射抜かれ、兜ごと首を飛ばされ、或いは馬が吹き飛ばされ楯が砕かれるなど、狙われればとても怪我で済む状態ではない敵の存在が分かってきた。鎌倉軍はその恐ろしい敵を特定しようと山上の櫓を偵察すると、髪を子供のようについに結び上げて鎧兜は着けず、腹巻だけを身に付けて次々と早射ちをしている勇者を見つけた。良く見れば武士では無く女性である。

寄せ手の中でも弓には自信のある藤澤四郎清親という信濃の武士が、この様子を見て「是ほどの軍勢が、あの女性一人に射られて山城一つを攻略出来ないのは悔しいことである。武士として面目が立たない」と誰でも言いそうなセリフを言ってから城の後方の山に回り、敵陣の見下ろせる場所に隠れてチャンスを狙った。矢の中でも特に刃先の鋭い矢を選んで弓に番え、射撃名人の女性を上半身が当て易いと思うのだが相手が女性というので加減をしたのか、変な気を起こしたのかは知らないが、藤澤清親は相手の太ももを狙った。

痛さと恥ずかしさで、女武者が倒れ伏してしまつたから守備軍の戦鬪力が落ちる。結局、鳥坂の城砦は源氏軍に落とされ、立て籠つた平家軍は或いは逃れ、或いは自害して果てた。城小太郎資盛は建造物に火を掛けた後で行方が知れなくなつたとする説と自害した説がある。これで常陸国に発祥した桓武平氏は消滅したことになるのだが：

鎌倉の軍勢が砦の中へ侵入した際に、敵の女性射手を狙つた藤澤清親は、さすがに気になつて櫓の上に進出した。其処には確かに自分が仕留めた敵の女武者が動けずに痛さを堪えていた。映画や演劇の世界だと女優さんが演じるから美人が苦痛に耐える情景が観客の人気を呼ぶのだが、歴史は超現実的であつて、そこに横たわつていたのは、城資盛の叔母さんに当る「板額御前(ほんがくごぜん)」と言う女武者である。で、この女性が何とも言い難いのだが、「…色黒く顔相荒れて眼光鋭く醜きこと、古代の伝説の醜女に劣らず…」つまりA級の不美人ということで、名門に生まれながら縁談が無かつた。名門と言うことで補足すれば、板額御前の母親は天武皇子・舎人(とねり)親王の血を引く奥州の名族・清原武衡の娘である。

外観はどうでも一応は女性であるから藤原清親は板額御前を介抱し、傷を労りながら捕虜として鎌倉へ連れていった。これが評判となり傷が癒えてから幕府の御所へ出頭を命じられた。源頼家を始め重臣たちが列座して、動物園の黒豹でも見物するように好奇の目を向ける中、板額御前は鎌倉殿中で悪びれず憶せず振舞つた。男ならば斬られるのだがギリギリの線で女性に分別された結果、何処かの国に流罪と決まつた。その時に列座していた御家人の中から阿佐利與一義遠(あさりのよいち)

よしとう」と言う安田系武田一族の武士が恥かしそうに進み出て、この女性囚人を拙者にお預け下さい：と嘆願したのである。

源頼家が「此の者は女性ながら朝敵であり最重要の囚人である。それを預かるには何か思案が在るのか？」と聞くと、阿佐利義遠は真面目な顔で答えた。「他意は有りませんが、見たところ男勝りの勇者のようですから、此の者を妻としてDNAを活用し武力に優れた男児を産ませ、子孫に伝えて鎌倉の御用に立てたく思います…」これを聞いた頼家は「顔形は醜いが(頼家が言った言葉なので女性蔑視の失礼が有つたらお許しを)確かに武士の力量には優れている。『蓼(たぐ)で喰う虫も好き好き』と言う諺もあるが本当なのだ…」と大笑いをして許してくれた。

阿佐利義遠は板額御前を連れて国許の甲斐国に帰つて行つた。見送る無責任な周りの連中は「強い武士を産めば良いが、そうでなかつたら一生のお荷物になる」と余計な心配をしたけれども大きなお世話である。板額御前の其の後は不明ながら戦国時代に甲斐武田軍で、阿佐利(浅利)式部丞信音(しきぶのじょうのぶおと)という忠勇無双の武将が活躍した話が、川中島合戦などを記録した頃の「烈戦功記」に残されている。

こうして平家本流の滅亡に遅れること十六年、北陸に栄えた桓武平氏平繁盛流も滅びてしまつたけれども「万骨の法則」からすれば、平家滅亡後の地方分流の興亡など見向きもされないところなのに、美人でも無かつた板額御前の縁談まで後の世に伝えられたのは奇跡に近い。

そもそも、この一族が北陸地方に定着して城氏を称するようになったのは平繁盛の子・維茂(これ

もちが鎮守府將軍として奥羽地方に着任し、孫に当たる繁茂(しげもち)が出羽城介(でわじょうのすけ)兼東防衛のため置かれた城の事実上の城主に任命されてからのようである。

ところで平家本流が壇ノ浦に沈んだ際に、天皇家に伝わる「三種の神器」のうち、「草薙の剣」が安徳天皇と共に海に沈められて回収出来なかつたことは公然の秘密であるが、越後で滅んだ城一族にも「野干(やかん)」と呼ばれた宝剣が伝えられていたらしい。

木曾義仲との戦いに敗れ、そのショックで急死してしまつた城資長は、不確かな資料だが越後の国司に任命されていたようである。そうであれば常陸国に残つた平維幹の系統が常陸国の大掾職止まりで職名を姓にしたのに比べて、北陸に來た平維茂の末裔である城氏は格段の出世をしたことになり、万骨組には入るけれども、ある程度は世の中に知られていたことになるのである。

城資長の七代前が平繁茂だとされている。繁茂の父親が平繁盛の子ながら伯父・平貞盛の養子となつた余五將軍こと平維茂なので、日本外史の平氏系図に支流として唯一、記載されているのが此の系統である。余計なことを言えば桓武平氏の源流を自称する「常陸大掾」のことなど一行も触れられていない。その平維茂が北陸方面に赴任した後には嫡男の繁茂が生まれた。その繁茂は生まれて直ぐに行方不明になつたという伝説がある。

伝説であるから「嘘」の要素が濃いのが、普通に暮らしている庶民には付たくても付かないのが伝説であるから、平繁茂には英雄の要素があつたといふことなのであろう。国の高官の息子が行方不明になつたと言うので大掛かりな搜索が行われ

各地を隈なく探したが見つからず、四年が過ぎて父親の平維茂が夢を見た。古狐が老人に姿を変えて「領国内の狐塚と言う場所に来るように」と言った。指定の場所に行くと白髪の老人が幼児を抱いて待つていた。子の顔を見ると忘れもしない我が子である。喜ぶ両親に狐の爺さんが言った。「此の子を日本の王に成さんとしたが、その位には至らぬことが分かった。(誰も頼んで居ないのに余計なことをする)しかし、本朝に隠れなき名を顕すことは分かった。此処に一振りの太刀を与えるので、慎みて家を滅ぼさぬように。」と言い残して幼子と太刀を置き、怪しい爺さんは消えた。

成長した繁茂は狐の爺さんが言ったように、平清盛のような日本の王には成らなかつたが秋田城介(出羽国の次官の兼任であるが、奥羽地方の軍事力を握る)に任じられ、それから七代の人物が越後の国主になった。そして資長の代に城氏が滅び家伝の宝剣も行方知れずになった…。

出来の悪い怪談のような此のC級の伝説が何を意味するのは良く分からないが「北条九代記」にある話である。北条九代記は源氏を潰した後の北条氏の治世を記録したもので、桓武平氏を称しながら、出自が今一つ怪しい北条氏は政子夫人と源頼朝との結婚に依って天下を手中にする。北条氏は平家を滅ぼし、清和源氏を潰した。そして鎌倉幕府としての北条氏は、最後の桓武平氏とも言える城一族の残党をも滅ぼさねばならなかつた。その言い訳が「狐物語」のように思えてならないのだが、怪しくてもズボラでも伝説が残されているだけ世間には知られていることになる。

考えてみれば常陸国に興った桓武平氏の場合は名誉も功績も美しい部分を嫡男の貞盛が一人占

めにして都へ持って行ってしまったから、平繁盛のように仕事だけさせられて地元に取り残された者が、少しでもPRや自己主張をしようと思えば既に述べたように有名寺院に目立つ物を奉納するとか、嘘でも尤もらしい伝説を残すとかしなければならぬ。それなのに常陸平氏としては直系であり、郷土に定着した筈の大掾氏なのに「平氏、平氏」と大騒ぎをするだけで、何の伝説も残していないことが不思議であり残念な気もする。

話を大筋に戻して、平繁盛の子孫を辿る中で平家最後の華(華と言うには少し躊躇もあるが…)として活躍した「板額御前」のことを紹介したけれども、世の中は平等と言うか実にはバランスが良く出来ているもので、実は源氏方にも後世に名を残した女丈夫が居たのである。それが板額御前の城一族にとつては憎い敵である木曾義仲の身近なところに居た。その女性の紹介をしたいのだが、その前提として少し長くなるが木曾義仲の行動を説明して置かねばならない。木曾義仲も名人ではあるが結果的には万骨組に入り、最後の地に置かれた墓さえも長い間、放置されていた。

既に述べたように木曾義仲は立ち塞がる越後の城一族や平家が差し向けた軍勢を撃破して都に上った。越中礪波山(とみやまき)の合戦では牛の角に松明(たいまつ)を付けて放し十萬の平家軍を二方に滅らした。正に破竹の勢いである。寿永二年(一一八三)七月、木曾義仲は京都に迫り、追われる平家は安徳天皇と三種の神器を奉じて西に逃れた。天皇不在では困る朝廷は、後白河法皇の意向により安徳天皇の異母弟である三歳の尊成(なりひら)親王を後鳥羽天皇として即位させた。この時に木曾義仲は平家追討の令旨を発した以仁王の子を天

皇に推戴したらしいが、後白河法皇は愛人(丹後局)の意見に従って尊成親王が選ばれたという。やはり女性が強かつた…。(続く)

【風の談話室】

暑い夏であった。9月を迎え、虫の鳴き声も盛んになり始めたがまだまだ元気が今一つない。

原発を稼働させないと電力が不足するなどと言われていたが、この夏はエアコンはつけっぱなしの状態であったが電力不足になる事はなかった。ある程度の電気料金の値上がりはやむを得ない所があるが、実質的には値上げの必要などはないのだ。必要なものを必要な時に必要な量だけ、とはジャストインタイムの考え方であるが、この生産方式の根底は価格はお客様が決めるのである。

東電の価格設定は、原価に欲しい利益を定めて設定しているのだから、経営努力の全くいらぬ企業の様である。ちょっと手厳しいがそう言われても何も感じない体質が、本当は怖い。

【一寸一言、もう一言】

「書き手」の反省

打田昇三

言葉が喋れて文章が書けるのは人間の特権であるから、此の欄も多くの方に「つぶやき」程度に気軽に活用して頂きたい。

しかし「ふるさと」『風』の会員は第三者に読んで頂く文章を書いているので、其れなりに気を使い努力をしなければならないと思っている。書

いた本人が満足していても、読者に理解して貰えなければ「表現」の意味を成さないからである。

丁寧の説明すると文章は長くなるが、短くても用件だけは伝わる文章があり、日本では明治九年に熊本で起きた「神風連の乱」で戦死を遂げた鎮台司令官・種田少将に同伴していた粹筋出身の女性が東京へ打った電文「ダンナハイケンナイ、ワタシハテキズ（軽傷）」。徳川家康の家臣・戦国武将の本多某が陣中から妻に宛てた手紙「一筆啓上、火の用心、おせん泣かすな、馬肥やせ」。ローマ時代の英雄・シーザーが愛人のクレオパトラに知らせた「来た、見た、勝った」などは良く知られる。紫式部か和泉式部か清少納言か三人のうちの誰かが「あらず」の三文字で済ませたのが最も短い？ 文らしいが、これは事前調整を必要とする。

結婚式などの来賓挨拶と違い、短かければ良いというものでも無いが、文章の場合は自分の言いたいことを伝えようとすると、どうしても長くならないから読み手に自分の真意がどう伝わるか、を考えながら書くことが重要なのかも知れない。

過労死とは何事だ！

菅原茂美

日本では過労死が多すぎる。外国では殆ど無いそう。そもそも、相当する単語さえなく、英語では KAROUSHI と言われ、国際共通語になっている。

病死としての過労死は心筋梗塞・クモ膜下出血・急性心不全などであるが、痛々しいのは2009年の過労死自殺者が63名。働き盛りの30〜50歳代が過酷な労働強要に耐えきれず、自ら命を

断つ。日本人は働き者などといわれるが、裏を返せばこの始末。正直者がバカを見て、悪い奴ほどよく眠る。何が先進国だ？ 勤勉の美德も悪魔の餌食とは許せない。これは、効率主義・成果主義が生み出した歪な社会現象だ。

現在の労働基準法では、労働時間は1日8時間、週40時間と定められ、これを超える場合は労使協定が義務付けられている。但し超過勤務は、年間360時間を超えてはならない・超過勤務は、25%以上の割増賃金を支払わなければならない・：となっているが、現実はこちらを遙かに超える「奉仕」が強いられ、訴えがなければ黙示される。これを犯した経営者は、わずか30万円の罰金か、6か月以下の懲役となっており、あまりにも人権を軽視した罰則だ。

勿論、非常に良心的な経営者もおられることだろうが、労働者が失職を案じる心理を逆手にとり、乱暴極まりない経営者は、断固として労働基準監督署に訴え、世界に恥じない労働環境を構築すべきである。

【ことば座だより】

平将門伝説・苺萱姫物語

白井啓治

ことば座も十月が来ると、創立満七周年となる。七周年記念という訳ではないが、上手い巡り合わせで、東京公演をもつ事となった。

両国のシアターX（カイ）との提携公演で、伊藤道郎に捧げる「日本組曲」と三つのジェスチャーによる朗読舞劇、平将門伝説・苺萱姫物語を十月二十三、二十四、二十五日の三日間、上演するこ

ととなった。そこで今回は、日本組曲を主題とした朗読舞劇、苺萱姫物語の公演までの歩みについて広報・宣伝文から紹介してみたい。

・伊藤道郎に捧げる「日本組曲」と三つのジェスチャー

作曲家ホルストと言うと直ぐに「惑星」が思い起こされるが、この惑星を作曲していた同時期に、ホルストが伊藤道郎とどのような出会いを持ち、どのような話があったのかは定かでないが、伊藤道郎のために書かれた曲が「日本組曲」である。

この事は、ホルストの自筆楽譜の表紙の書き込みに「この組曲は、マリオネット・ダンスを除くすべての主題旋律を提供してくれた日本の舞踊家伊藤道郎のために書かれた」と明記されている。

しかし、この「日本組曲」は、伊藤道郎がロンドンを離れてアメリカに渡った事から、伊藤道郎がこの楽曲の存在を知る事もなく、当然のことながらオーケストラで踊る事はなかった。

この曲の存在と作曲の謂れを知ったのは、ミチオイトウ同門会の現会長である柏木久美子のことば座の朗読舞に共演した時であった。伊藤道郎の孫弟子としては何とかしてこれを舞台に乗せ、舞ってみたいという事であった。

この話を受けて、日本組曲を聞き、そこから受けた印象とことば座の進めている表現の方向性に一致点を見出すことが出来た事から、12年6月の定期公演で、実験的に日本組曲の幾つかの主題旋律をモチーフに将門伝説を舞物語に創作しピアノ演奏をバックに演じてみた。

この試演の結果、オーケストラでの新説日本組曲「平将門伝説・苺萱姫物語」の本格舞台化への

十分な可能性が確認され、ことば座の企画として立ち上げることになったのであった。

また本企画に当初より参画している、というか提案者でもある舞踊家柏木久美子の所属しているミチオイトウ同門会は、2013年で設立50周年を迎えることもあり、伊藤道郎のために書かれたとする「日本組曲」を主題とした朗読舞劇「平将門伝説・苺萱姫物語」を公演することは意味深いものがあり、また日本の舞踏劇界においてもその先駆者であった伊藤道郎を再認識してもらいう意味でも大いに意義のあるものと考えられる。

また、この企画を立ち上げた時、プロデュースを担当してくれる塩見えりこより、ヨネヤママコと伊藤道郎との関係を聞かされ、この企画の事をママコに話したところ、賛同と共演のお話を頂き、伊藤道郎に捧げる三つのジェスチャーとして、ホルストの日本組曲を主題とした「平将門伝説・苺萱姫物語」の公演へと駒を進めることが出来たのである。

・「ことば座」と「朗読手話舞」について…

ことば座は、茨城県石岡市にあるギター文化館を発信基地として、霞ヶ浦を中心とするその周辺地域の歴史・文化をモチーフとした詩物語を創作し、その朗読によって手話を基軸とした舞に表現する、という新しい舞台表現を実践する劇団である。手話を基軸とする舞『手話舞』を演ずるのは聾の女優、小林幸枝。

朗読手話舞は、ことば座を主宰する脚本・演出家の白井啓治が、聾者の小林幸枝と出会い、彼女の話す手話が舞のような流れを創り、その動作表現に舞台でのスケール感の秘めてあることに着目

し、創出した表現である。小林幸枝には、演劇や舞の経験は全くなかったが、手話という少ないボキャブラリーでありながら、物語を舞い語るその動作や表情は詩に表現する言葉と同様の広がりと言速性を見ることが出来る。

小林幸枝の手話を舞にする表現は、万葉集などの恋歌を表現した時に特にそのスケール感が増し、綺麗な流れを創りだすことから、「常世の国(常陸国)の恋物語百」と題した恋物語をふる里の歴史文化の中に主題を求め、創作して発表している。

発信基地としているギター文化館は、東京労音を母体とする文化館で、スペインのギターリスト、故マヌエル・カーノから託された18本の名器ギター「カーノ・コレクション」を所蔵するとともに、ギターの繊細な音を楽しめるホールを持つている。このホールは、ギター演奏のためのホールであると同時に、言葉の風の流れとして舞うための小ホールとしても最適な場であった。

このギター文化館の代表である木下明男氏の協力を得て、朗読手話舞の発信基地として発表している恋物語は、現在第三十二話まで進んでいる。ギター文化館に於いて小林幸枝が朗読で手話舞を舞う表現を観て共鳴した、伊藤道郎の孫弟子である柏木久美子(ミチオ・イトウ同門会会長)が2011年1月の公演より共演することとなり、ホルストの日本組曲に出会う事となったのであった。

・日本組曲を朗読舞劇にする意義について

今、もし伊藤道郎が日本組曲を舞うとしたら、この組曲にどんな物語としてのポエムを持って舞を創造するのであろうか。

伊藤道郎がヨーロッパ、アメリカで評価を受けた時、そこには強烈なジャポニズムの礼賛があったといえよう。同時に道郎のなかにも、日本の古典芸能を洋楽の元に既成を突き破った表現として開花させてみたいという欲求もあったのではないかと、勝手に推察してみた。

そんなことを思いながら、日本組曲を舞いとして表現するためには、12分の組曲をそのまま舞うのではなく、そこに何らかの既成を打ち破った物語を持って表現すべきであろうと考えたのであった。

既成を突き破るといふ視点から見ると、聾者の言語である手話が朗読と一緒に能の舞のような流れを創り出すという表現は、まさにこれまでの舞踊の既成を打ち破るものであるといえる。それは伊藤道郎が大正の時代に能の題材をモダンダンスに表現したことに通じるであろうと思う。

現在、ことば座の演じている朗読手話舞は、主旋律としての朗読に「手話を舞いに昇華させた表現」と「詩の心の流れを舞いにする所謂伊藤道郎の言うところのダンスポエム」とのコラボという形式で行っている。日本組曲を主題とした朗読舞劇「平将門伝説・苺萱姫物語」は、朗読に①手話舞 ②テンジェスチャー ③ダンス・マイムの三つのジェスチャーがコラボレーションで舞台を協創するもので、正にコンテンポラリーな舞台と言える。

・何故、平将門伝説「苺萱姫物語」なのか…

日本組曲を日本で最初に舞表現するのであれば、先ずは既成に囚われず自由な発想のもとに新説日本組曲の物語を持って演じられるべきであろう。

そしてこの事が、ホルストが伊藤道郎のために書いたという日本組曲の有している力の広がりであるろうとも考える。

今回書き下ろした、伊藤道郎に捧げる日本組曲を主題とする朗読舞劇「平将門伝説・苺萱姫物語」は、映画・溝口作品の雨月物語、黒沢作品の羅生門などにみられる日本の一つの歴史的原風景としての物語に並ぶものであり、①伊藤道郎のテンジエスチャー ②ヨネヤマママコのダンス・マイム ③小林幸枝の手話舞の3つのジェスチャーによるコラボレーションとして協創される舞物語である。

伊藤道郎に捧げる舞台と考えた時、「テンジエスチャー」「ダンス・マイム」「手話舞」という三つのジェスチャーによるコラボレーションは、アバンギャルドだとかコンテンポラリーという言葉に最も似つかわしいだろうと考える。

日本組曲の朗読舞劇に表現することの意義を述べるとすれば、新説日本組曲として将門伝説苺萱姫の物語をもって、ダンスポエムとダンス・マイム、そして手話舞のコラボレーションによる「協創」という事に尽きると言える。

なお、私的な思いではあるが、今回の脚本では常陸国組曲となるが、日本の各地に日本組曲を主題とした「おらが国組曲」が創造されることがあれば、二人の巨人が有する文化力の花が満開するであろうと思うと同時に、それを願うものである。

さて以上が、宣伝・広告文からの公演案内である。今回の物語は、出演者が舞台上で直接絡み合っている芝居表現がないことから、稽古は各パートごとに行っているのであるが、先日、ヨネヤママコさんとの稽古を行ってきた。

今回の舞台は、台本を軸にして三つのジェスチャーがそれぞれ自由なイメージによる表現を創造・構築していき、一件バラバラ様のイメージを朗読と音楽が接着的な役割を果たしながら一つのものに仕上げていくという演出方法をとっている。

ママコさんとは、台本を渡す時に舞歌としての詩はどのように解釈し、イメージを作られても構いません。将門の体制批判の思いを現代の原発問題にたとえても構いません。或いは戦国自衛隊のように将門の乱に核兵器が現われても構いません。このように話していたのですが、ママコさんが道化として構築されたダンス・マイムは、田川水泡の漫画「のらくろ」を彷彿とさせるものがあり、将門を借りての現代批判の道化を「のらくろ一等兵」のダンス・マイムが出て来るとはだれが想像し得たのだろうか。まさに脱帽であった。しかし、それだけではなくそこに熱烈なるオクラホマキッズで「とかく浮世は色と酒」となるのだから、それはもう乞うご期待である。

稽古に同行した小林幸枝は、のらくろもオクラホマキッズも知らないのであるが、ママコさんのマイムを見て腹を抱えて笑い転げていた。

舞台衣装もイメージ画が出来て来ていたが実にユニークでお洒落なものになっていた。小生がアバンギャルド、コンテンポラリーと話していたのをプロデューサーの塩見えりさんの感性で受け取り、衣装を熊谷敬子さんをお願いし、正にアバンギャルドな平将門、苺萱姫となった。

この日、ヘア・メイクを担当して頂く松橋亜紀さんが来ていたので、小林の将門は髪の毛を剃って丸坊主でもいいからね、と話したら、「それは良

いかも……」。

小林にそのことを伝えると「いやだ〜ッ！」であった。

本当に乞うご期待の舞台である。

舞台背景には、ことば座ではもうお馴染みの、兼平智恵子さんの常世の国の五百相が、平将門の願ったであろう人の心として、小林一男さんの湖畔の松の装美に掛けられ、朧な月の光に揺れる。

ふるさと風の会は、ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造考える会として発足したのであるが、その兄妹としてのことば座が、世界の作曲家グスタブ・ホルスト、舞踊家伊藤道郎に主題を貰って、道郎の最後の関係者であったヨネヤママコとのダンスマイムのリードで、ふる里の伝説物語を、両国シアターXとの提携で発表できることは、ふるさとを大きくヨイショする事に繋がるであろうと思っている。

平将門が訴え、実現しなかった思いは、正に今日の我らがふる里にとっても切実な思いとして受け取り、未来に繋げて行く事ではないだろうか。

ふるさと風の会では、この風の談話室へのご投稿を募集しております。先月から一寸一言のコーナーを新設し、お気軽な一寸一言をお寄せいただければと思っております。原稿は、毎月25日〆切です。ご投稿お待ちいたしております。(ひろぢ)

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ことば座東京公演

10月23日(水)・24日(木)・25日(金)

劇場シアターXカイ

伊藤道郎に捧げる日本組曲と三つのジェスチャー

さくら

朗読舞劇 平将門伝説：苺萱姫物語

三つのジェスチャー(伊藤道郎のテンジェスチャー/ヨネヤマママコのダンスマイム/小林幸枝の手話舞)がホルスト作曲「日本組曲」を軸に集結し、平成日本の舞物語を創造!!

脚本：演出 白井啓治
音楽監督 橋爪恵一
編曲 山本 光
舞台監督 久保田由香里
舞台美術 兼平智恵子
小林一男
衣装 熊谷敬子
照明&音声 シアターX
ヘアメイク 松橋亜紀
DTR撮影 小松 進
アナウンス 平山恵美子

出演
(三つのジェスチャー)
・ダンスマイム ヨネヤマママコ
・テンジェスチャー 柏木久美子
・手話舞 小林幸枝
朗読 しらみひろぢ
マイム語り 明神任土米
演奏
ピアノ 山本 光
クラリネット 橋爪恵一
ビオラ&ヴァイオリン 中小路淳美

入場料：自由席 4,000円 (障害者及び小中高生 3,000円)

お問い合わせ&お申込みカーニバルカンパニー 090-2564-3198 fax042-522-6135

10月24日(木曜日) スペシャル講演会「伊藤道郎…継承されたメロードと音楽」

(16時~18時：入場無料)

(司会) 小峯健治 平山恵美子

- ・「日本組曲」と伊藤道郎 講師：東京音楽大学教授 武石みどり
- ・伊藤道郎の魅力 講師：井村恭子 佐藤桂子 伊藤弘子 伊藤胡桃
- ・今、ダンス・アーカイブが面白い！ 講師予定：正田千鶴 片岡康子 加藤みや子
- ・テンジェスチャーデモンストレーション

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35 Tel 0299-24-2063 fax 0299-23-0150